"町民総スポーツ"に取り組む大津町

●体育館は予約待ち！

「とにかく施設が足りん。町の体育施設は予約でいつも満杯なんです」と、大津町校区スポーツ振興会会長の河本始さん。大津町はとにかくスポーツが盛んなところ。スポーツ障害保険の加入者数、約七千人（熊本市に次いで第二位）は町民の約三割。スポーツ教室・講習会が年二十二回、大会が年十八回、参加者は約五千人。この数字を見ただけでも分かります。

大津町は"いかに多くの人がスポーツを楽しむか"を目標に、多くの住民グループを育成し、町民の自主的な活動による"スポーツ振興"を進めています。その中心的な存在が「校区スポーツ振興会」。小学校区ごとに設置されるという珍しいもので、現在八つの振興会があり、各々が年三回のスポーツ大会を開催しています。こうしたことによる住民へのスポーツの浸透は必然的に指導者不足をもたらし、大津町では、将来、"人口百人に一人の指導者"を目標に、独自の指導者の登録・派遣制度も作りました。また、町ではこうした大会のために、学校体育館も町民に開放しています。

ミニバレーボール大会〈護川小学校区〉

●子どもからお年寄りまで

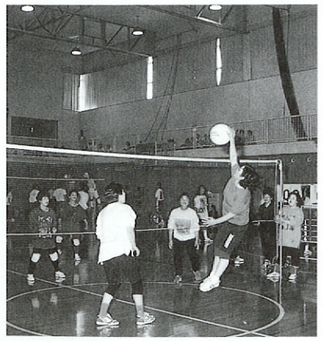
ミニバレーボールやシャッフルボード、ビーチバレーボール、ペタンク…。スポーツ大会で行われるのは、誰もが楽しめる競技ばかりです。

例えば、昨年の大津校区の秋のスポーツ大会は年齢制限なし。小学生から八〇代まで約三百八十チーム、千六百人が出場しました。その数は町民体育祭の参加数を上回るほどです。練習場の振り分けや会場の確保にと校区スポーツ振興会の事務局は年中大忙しです。

●新旧住民の交流にも一役

大津町は熊本市のベッドタウンとして、あるいは企業誘致が効を奏し、毎月三十人の割合で人口が増加しています。スポーツは新旧住民の交流にも一役買っているようです。

平成十一年、同町は熊本国民体育大会でサッカー競技の開催会場に内定しました。平成九年にはサッカー場や多目的広場を備えた"町民待望"の運動公園が完成する予定です。



大津小学校区スポーツ振興会長の河本始さん（右）と大津南小学校区スポーツ振興会事務局長の式森和彦さん

スポーツの楽しみ方を教える学校教育

思い思いのところで練習。跳び箱授業〈小島小学校〉

学校教育は生涯学習の基礎づくりの場。ここでは、主体性を発揮できる人間づくりを目指し、一人ひとりの個性を生かした教育が実践されています。「計画に合わせる方法」から「計画を合わせる」方法へ。今、教育が大きく変わりつつあります。

●みんながヒーロー

跳び箱を練習中の小島小学校の六年生。体育館にはいくつもの跳び箱が用意され、それぞれが自分に合った跳び箱を選びグループを作って跳んでいます。しばらくしてコツが分かってくると、一段高い跳び箱や違った跳び方をするグループへと移り始めました。先生の指図を受けるのではなく、自分の考えに従って…。また、グループ内ではお互いに教え合う光景がよく見られるようになりました。このコミュニケーションは生涯学習にとって大切なものなのです。

砂取小学校の、今日の授業は走り高跳び。ここでも自由に練習し、要領をつかんだ児童は次のバーへ移っていきます。時には戻ってくる児童もいて、やはり児童の自由選択です。授業の締めくくりは「体育ノート」。これには自己記録や理解したポイントなどの他に、"楽しさ・精一杯・ポイント・教え合い・のび"などの欄があります。今日はここが良かった悪かったというように、授業の最後に自分で評価するのです。人との比較ではなく自分自身がどうだったのかと。先生は、このノートを基に、みんなが楽しめるよう授業を工夫していきます。

最後までリズムがつかめず、最初のバーに止まった児童が一人いました。でも、彼女の体育ノートの"楽しさ"欄には「5」と記してありました。満点です。

●楽しんで身体を動かそう

心身に障害のある小・中学生が通う菊池養護学校。養護学校の体育の目標は「自分で身体を動かすことができるようになる」こと。中でも当校は特に体育の時間を多く取り入れています。授業内容も、生徒一人ひとりが楽しく参加できるようにと、いろいろな工夫がなされていました。中学生のサッカーは紅白に分かれてゲームをします。生徒の能力に合わせてシュートの距離を変えたり、ボールの大きさ、空気の入れ具合にも変化をつけます。太鼓を叩いての応援合戦も賑やかで、授業というよりは"楽しく遊んでいる"といった光景です。大好きなBGMの中、みんながそれぞれにサッカーを楽しんでいました。

手でゴールするのもOK。サッカー〈菊池養護学校〉

「精一杯やったかな？」体育ノートに自己評価を書き入れます〈砂取小学校〉